

幼児期における健康知識の習得に 関する研究 (第1報)

群馬女子短大

笠原 賀子

〔目的〕近年、わが国においては、成人病の増加とその若年化、とくに、幼児期における成人病予備軍の増加が注目されており、一生を通じる食習慣を左右するといわれる幼児期の食生活を見直すことは、必須の課題である。したがって、本研究は、基本的な生活習慣を習得する大切な時期にある幼児期において、それぞれの発達段階に応じた健康教育（とりわけ、栄養指導をはじめとした栄養知識の普及）を行うための基礎的資料を得ることを目的として、pre 調査を実施し、その実態を一部、明らかにしたものである。

〔方法〕①調査時期：1988年11月～12月 ②対象：群馬女子短期大学附属幼稚園園児（年長組）50名（♂26名，♀24名） ③内容：一般的な健康知識に関する22の項目（10分類）
④方法：幼児1人1人を個別に面接し、3つの絵の中から正しい1つの絵を選択させる方法*
*C.M.Hendricks ら (J.School Health 58(1)21,1988)

〔結果〕①正反応の割合は、非常に高く、しかも、半数以上が、平均点を上回っている。
②①において、性差は、ほとんどないが、その分布や誤反応の項目などに違いがある。
③正反応の割合が、低い群と高い群では、誤反応の項目に若干の差がある。④禁止すべき内容の項目は、有意に相関が高い ($p < 0.005$)。⑤興味深い点は、歯の健康に関する項目であり、正反応が高い反面、誤反応も高い。〔考察〕以上の結果より、幼児期における健康知識に関する知識の習得は、本調査においては、比較的、良好である。しかしながら、各家庭における母親の食事作りに対する姿勢や家事手伝いの背景、両親の生活習慣や嗜好、父親の喫煙に対する態度などを強く反映していることが示唆される。